





メ
タ
ド
ー
ル

N
I
N
A

Ver. 2.0

エリート社員が
セクサロイド
義体で絶頂屈服

大企業メタブレインテックの研究開発部主任。
完璧なエリート社員だった新稲豊は罠に嵌められ、
気付いたときは「メタドール」と呼ばれる女性型
セクサロイド義体に意識を移されていた……

METADOLL
Type: SEXROID
LSM-098-YN

起動しました

人工脳
モジュール
接続済
疑似人格
エミューレータを
起動します

補助脳ユニットの装着によって自我を抑制されてしまった
新稲は最新型メタドールの「ニナ」として生まれ変わり――？

くそお……
弓香さまの思い
通りになんか……

素直な反応ね。
命令よ、イクときは
イクって申告なさい

抵抗しても
無駄なものに。

くそ、くそ、
絶対に耐えて
やるんだ……

メタドール
は……

マスターに
お仕えるのが
存在意義です

こんな支配
いつか……抜

これで先輩
人形っすね
じゃーいいや
これ発

メタドールNINA.

～エリート社員が
セクサロイド義体で絶頂屈服～
Ver.2.0

原作：九重慧

漫画：れいとうみかん

それでは撮影
入りまーす

5

4

3……

21世紀半ば。

巨大企業
メタブレインテックが
世に送り出した
自律思考型アンドロイド

「メタドール」は、
社会になくってはならない
存在となっていた

だが「ハイエンド・クラス」
メタドールの中枢に
人間の「心」が移植されて
いる事実は

厳重に
秘匿されていた

え？

メタドールの
“人間らしさ”の
秘密ですか？

メタブレインテック 事業推進室主任

……かつて
研究主任だった
新稲豊という天才が、

Aーコアに
人の意識を宿すことに
成功しました

メタドール開発の
第一人者 桐生弓香

桐生弓香

すべてはそこから
始まったといえます

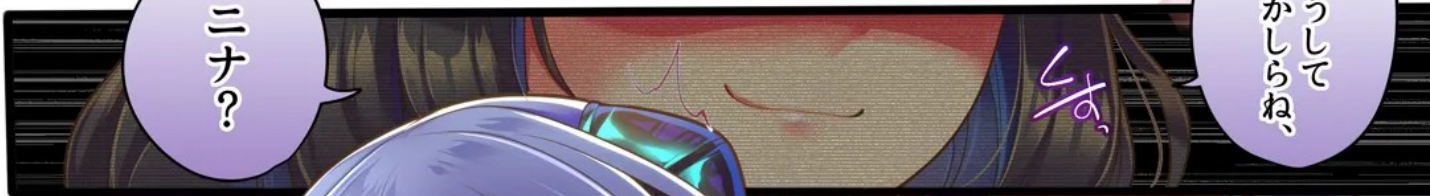
桐生の同期で、
ライバルでもあった
新稲という男の存在



新稲クンの
その後ですか？
それが誰にも告げず
ある日突然姿を
消してしまい……



今頃どうして
いるのかしらね、



ニナ？



あの新稲くんも
メタドールに人格移植されて
今じゃ私に絶対服従のお人形

おかげで重要機密も
全て提供してくれて
感謝してるわよ！

申し訳
ありません、

わたしには♡
分かりかねます
……っ♡



待って
ください

先輩……
じゃなかった
二ナは手元に
置くはずじゃ？

そうね。業務移行が
済むまでは、会社の備品
として使ってやるわ

……いずれは
出荷するけどね

よく
仕上がってる
じゃない
これなら
いつでも出荷
できそうね



これからは
備品としてお役に
立てるよう、
頑張ります

認識刷り込みで
すっかりメタドール
としての自覚が
できたのねえ？

はい、
弓香さま

ぷっ……
あはははっ！

おは

エリート
気取りだった
あの新稲くんが
いいザマね！

ふふ

？

女の身だしなみや
化粧の仕方なんかの知識は
インプットされてるわね？

はい。常駐ライブ러리
としてインストール
済みです

……という
わけで

こちらのチームは
本日付をもって
私の指揮下に
入ってもらいます

——それから
紹介しておこう

オーケー。じゃ、これ
うちの女子事務職の
着替え一式。

明日から
これ着て出社
するように

弓香さま。
規定により
メタドールは——

性奉仕外で人間用の
衣服を着用できない
のよね？

おあ

フフ、安心して。
その制服には着用に
許可するチップが
埋め込んであるわ

！

ザンザン

本日付でこの部署に
「備品」として配置される
社内用メタドール「ニナ」だ

すでに稼働
している「マリア」の
姉妹機にあたる

LSM-098-YN
「ニナ」です。

姉妹機「マリア」
ともどもお役に
立てるよう頑張ります

仕事でも
ストレス解消でも
便利に使って
やってくれ

それと、こいつは
備品だが
新稲元主任の職責も
当面引き継ぐ
ことになる

……なあ、噂じゃ
あれ新稲主任
らしいぜ

しっ、声が大きい。
俺たちまで
粛正されるぞ

わたしは
セクサロイド型の
最新モデルです。

社員の皆様、
性処理が必要な際は
気軽にお声がけ
くださいませ



オフィスの備品となった
わたしは、昼は
通常業務をこなし――



一八時以降は
男性社員の皆様の
性欲の解消に
努めました



よろしければ
このメールを送信
するまでお待ち



おい、
ニナちゃん
また一発、性欲
解消を頼むぜ



正社員の皆様の社員証は、ICカードとなっていて、セクサロイド型を性処理モードへと強制移行できます





メタドールの
くせにAV
見るのかよ

あ……はい……
記憶領域の中に
映像資料が……

福利厚生の一環として
わたしとマリアは
定期的に社員の
皆様の性処理に
努めます

ニナちゃんの
マンコ……っ

きゅんきゅん
チンポ締め
つけてくるっ！

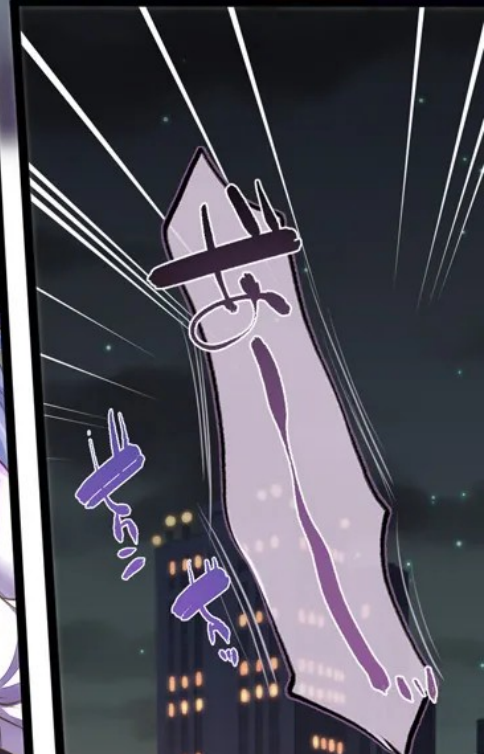
だってキモチ
よすぎる
からあっ♡

あああつ、
ごりごり擦れて
いいっ♡

トビ









広範囲が許容値を
超えています

ベースメイクの
調整から

メイク
下地...

ファンデー
ションの塗布

メンテナンス
が必要です

身だしなみの
許容値を
超過...



あー
疲れたー

もう忙しくて
肩バッキバキ

わかるー
目ヤバイ

あれ？
二ナ主任じゃん



アイカラーの
塗り直しが必要



リップの
調整



なんか精液臭い
と思ったら
二ナちゃんかー

申し訳
ありません

え？
悪いのは
男社員でしょ

むしろ助かって
るんだよねー
セクハラとか
全然ないし

雑用も
ないしねー

てか最近18時以降
って守らないヤツ
増えたよね

まあ新型公開で
忙しいからねー



……あ。

ねえ二ナ主任、確か
社員は誰でも『奉仕』
して貰えるのよね？

私もマッサージ
してもらっちゃ
おっかなろ





女性への性奉仕中は
何故か、“勃起”する感覚が
メモリに再生されます

女性型セクサロイド
であるわたしに
存在する筈もない
パーツなのに――

あぁっ……♡

あー
！っ！！
ニナ主任の
目が
ピンク色！

自慰モード
への移行を
……

性感情報の
負荷上昇中……

こいつ女への
奉仕で欲情
してやんの

これは
お仕置きだねー、
ニナちゃん？

え、ヤバ
www

セクサロイドの
くせにまだ
男気分が抜けない
わけ？www

モロに
由り誤り……♡



うっわ
うっわ
でっかW

セクサロイド
えっぐぐ

いいよねー
作り物だから
乳首もキレイでさあ

うらやまー

えー
肩凝りそう



ふう……っ

しかも感度
やばいしね
日常生活
無理じゃない？

セックス専用機
だからこそねー



確かに
これじゃねー

おっつも
wwww

こんなの
ぶら下げて
歩けないわー





.....えっ？

わたし

！

自由に
思考できて
いるの!?

.....
やっぱり
そうだ

補助脳の
自我支配率が
三〇%まで
低下してる

この体のエネルギー
残量が低下した際に
補助脳が誤動作
したのかしら？

~~~~ああくそつ、  
意識しないと口調が  
引っ張られる！

いや、  
なんでもいい

——こいつは  
二度とない  
チャンスだもの



今なら  
マスターたちに  
会わないように  
遠くまで  
逃げられる

お金を稼いで、  
別な義体へと  
意識を移植する  
方法を研究して  
……

お金を稼ぐには  
セクサロイドの  
機能を利用するのが  
最も合理的……

問題  
ないわ

この  
エッチな体なら  
しっかり稼げる

娼婦として  
客を取ったり……

エッチな配信で  
わたしのオナニーを  
見てもらって……

んっ♡





——っと、  
いけない

その前に深夜の  
性処理業務を  
こなさなくちゃ



……問題は  
逃走経路だ

所持金がないから  
長距離トラックに  
乗せてもらおう

乗車賃の代わりに  
セックスすれば、  
わたしも気持ちよくって  
WIN-WINのビジネスだ

性処理  
業務は最優先  
タスク……

そう、  
最優先  
だったわね……



——性処理  
モードに  
移行します







そんな……!

わたしは性奉仕で  
優秀な成果を  
出していたはずだ!

ま、処分前の記念に  
自我を戻して  
あげたんですよ

ぶっちゃけお情けで  
逃亡を見逃しても  
いいかって思ったん  
スけど……

先輩の思考、すっかり  
セクサロイド型に  
染まっちゃってw

先輩の性奉仕は  
優秀ですけどw

そ、そんな  
ことないっ!

えー

だって、その  
エッチな衣装  
自分で着て  
興奮しちゃっ  
てるじゃん

瞳がピンク  
っすよw

そ、それは――

ほら。

そのエロおっぱい  
触られるだけで  
性衝動を我慢  
できないっしょ?





このずっしり  
おっぱいを  
乱暴に揉まれて……

触られてもいない  
乳首で感じて



無様にイキ顔  
晒しちゃうような  
情けない  
セクサロイド  
……

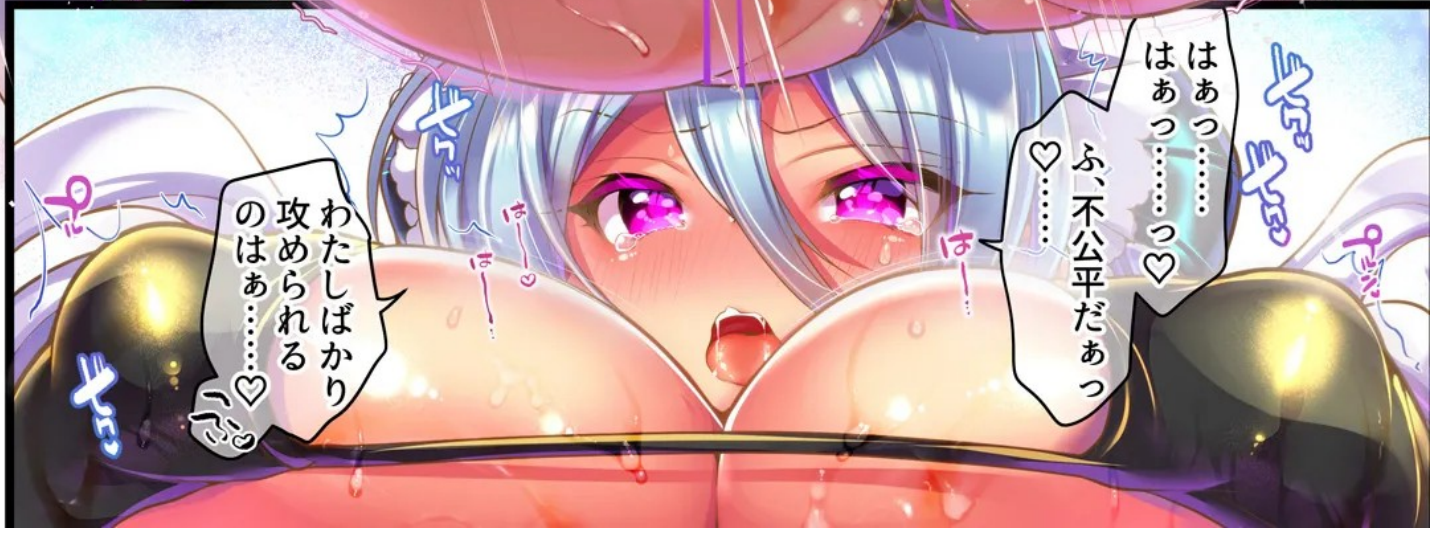


それが今の  
先輩なんスよ





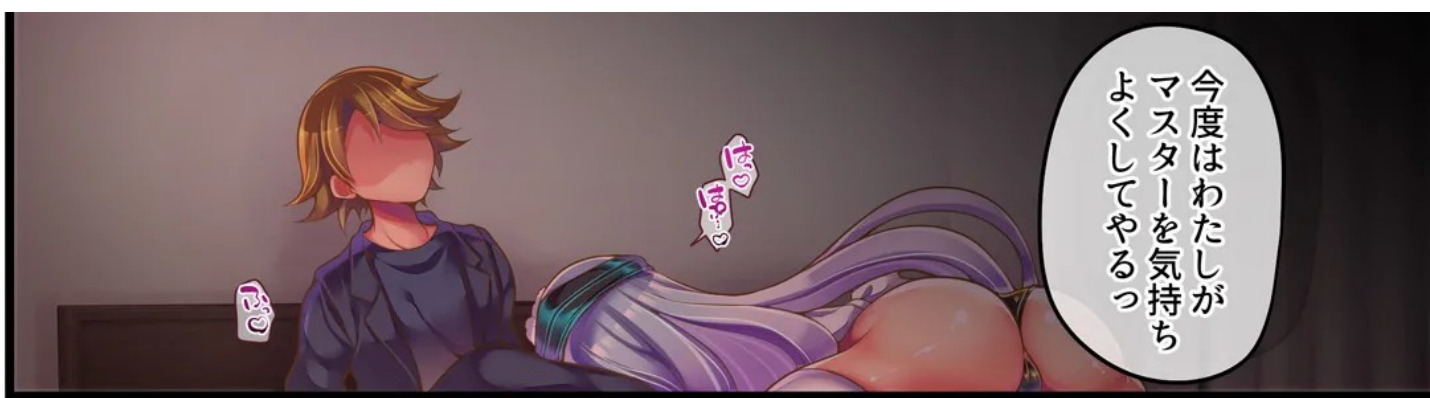
あーあ……マジで  
おっぱいだけで  
イっちゃって  
それが先輩の  
自我って  
ヤツです?w



はあっ……  
はあっ……っ♡  
ふ、不公平だあっ♡……

わたしばかり  
攻められる  
のはあ……♡





今度はわたしが  
マスターを気持ち  
よくしてやるっ



ほあ……♡

マスターの  
おチンポをつ♡  
わたしの……  
おくちでっ♡  
しごいてやる♡



ろうら！  
みへみろ……♡

マスターの  
正しいチンポ♡  
わたしの口で  
脈打って……♡

おっきくなっへ  
きへる♡♡

射精したいん  
だろ！だめだっ♡  
まだ射精させて  
やらない……ッ♡















いやー俺の  
隠された才能？  
って言うんスかね？

オナナの  
気持ちいいトコが  
わかるんスよ

ちくしょう、  
こいつ本当に  
上手いっ……！

ほらっ♡

くそっ

……！

こんな馬鹿マスターの  
愛撫なんかで感じて  
たまるかあっ……！？

命令も使わずに  
手だけでわたしが  
感じるわけ♡

さすが  
先輩！

んじゃ  
失礼して……

ふん  
……っ  
よくある♡  
手マンだろ

くそっ……また  
軽くイった……













でも大丈夫  
わたしはまだ  
冷静になれる

は  
は♡  
♡

わたしの自我さえ  
残っていれば……  
チンポなんか  
屈するはずがない！



でも大丈夫  
わたしはまだ  
冷静になれる

は  
は♡  
♡

わたしの自我さえ  
残っていれば……  
チンポなんか  
屈するはずがない！



でも大丈夫  
わたしはまだ  
冷静になれる

は  
は♡  
♡

わたしの自我さえ  
残っていれば……  
チンポなんか  
屈するはずがない！

やっぱ指だけで  
イっちゃったww

危なかった……  
セクサロイドの快楽に  
頭が支配される  
ところだった

やっぱ指だけで  
イっちゃったww

危なかった……  
セクサロイドの快楽に  
頭が支配される  
ところだった

[illegible]





また勝手に  
イッてるw

ま、まだ勝負はあ、  
ついてない……っ





そんな  
紅い目して  
よく言う……

チンポがほしくて  
たまらないのは  
そっちでしょ？

わたしの  
膣内に……

は、早く  
挿れたくて  
堪らないん  
じゃない、

どう……

あんっ♡



ズリッ……

また  
また



絶対に、  
セクサロイド  
なんかに  
ならないっ♡

そつ、そんな  
わけ……  
わたしはまだ心まで  
セックス人形になっ  
て、  
ない……

はっ♡

はっ♡





なるんじや  
ないんだよ



もう、とっくに  
なってるの

また  
素股で……ッ



おっぱい



先輩はもう  
チンポ搾ることで  
思考領域一杯の  
淫乱セクサロイド  
でしょ

挿れられても  
ないのに

イってる  
……っ♡

アハハ

アハハ

アハハ





せめて睨みつけるのが  
唯一の、そして  
最後の抵抗だった

##

〜

わたしの体は  
すっかり欲情して、  
チンポに媚びるように  
膣内をヒクつかせていた

〜

〜

〜





コレを挿れて  
もらったらどんなに  
気持ちいいんだろう……

おかしい……補助脳に  
支配されてないのに  
マスターのチンポの  
ことしか考えられない



ここで屈したら  
マスターの  
思っつぼなのに……

全身が  
疼いてっ……

こんなの  
ズルイ……!!



わたしの中に  
ザーメンぶちまけて  
ほしい……っ









ちよつと先輩

オナホが腰引いちやだめっスよ

これだから擬似人格モードは……

まだ、だめえ♡  
わたしい、  
腰、勝手にうごいちゃう♡

いっしょに♡

ふん♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡

おーい♡





勝てないっ♡  
ひんっ♡

わたしは  
セックス人形  
だからあ♡

チンポには絶対  
勝てないですっ♡  
♡♡♡

あっ、また  
……いくっ

乳首抓ると  
マンコ締まるっw

ドMだねっ

先輩……いや  
ニナちゃん





マスターの精子  
漏れ出してんぞ！  
雑魚マンコ  
緩みすぎ！



ちゃんと身の程  
わかってます？

ニナちゃんは  
一体なに？

わたし……  
はあ♡

わたしは皆様の  
おちんぽに  
お仕えする……♡

性欲解消専用  
メタドール♡

セクサロイド  
です♡♡♡

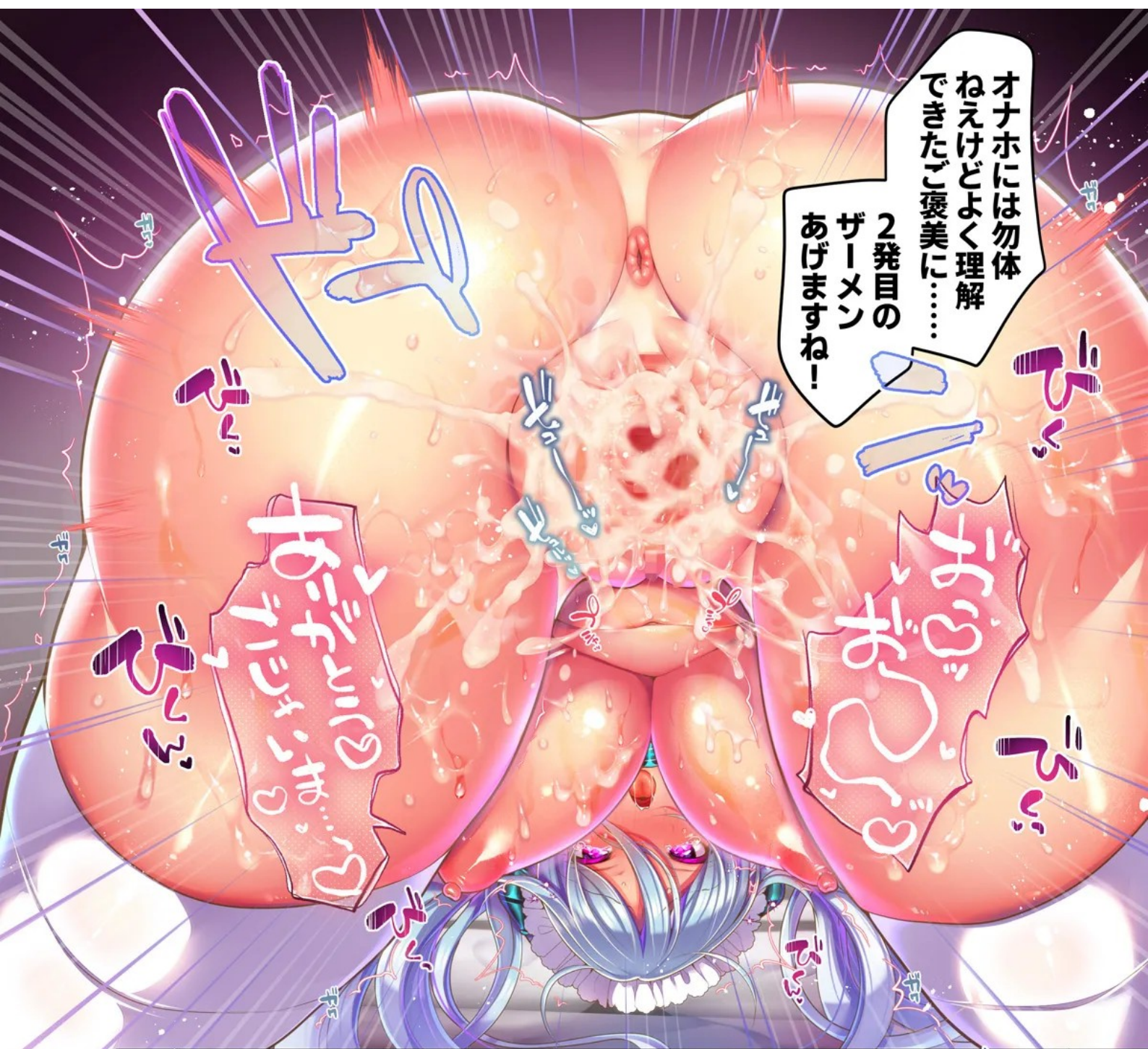
よくわかつ  
てるじゃんW

おちんぽ

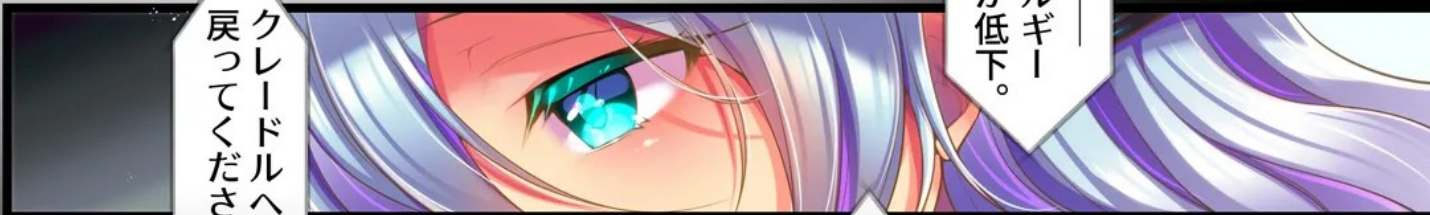
おちんぽ



オナホには勿体  
ねえけどよく理解  
できたご褒美に……  
2発目の  
ザーメン  
あげますね！



警告——  
エネルギー  
残量が低下。



クレードルへ  
戻ってください

繰り返します  
……





これは覚えて  
いるわね?



じゃあ、そこで  
エネルギー切れまで  
ゆっくり眺めてなさい

か、かしこまり  
ました……

んっ♡



フウン。お情けで  
自我を残して  
もらったんだ?

はい、  
弓香さま

はあ……男って  
一度やった  
セクサロイドに  
甘いから面倒ね



お前のモノを  
象ったデイルド

そう

この中には  
お前の元の体から  
採取した精液が  
詰めてあるわ



はい、  
弓香さま



おいでマリア



私ね、お前の遺伝子  
だけは評価してるの

だから、精液だけ  
貰うことにしたわ

ああ、妊娠する  
つもりはないわ

受精卵は人工  
子宮で育てるから

マリア、それを  
私の膣内に挿入して  
私を気持ちよく  
しなさい

かしこまり  
しました

ニナ

あんたは  
跪いて自分の精液が  
奪われるところを  
見ながら自慰でも  
してなさい

そ、そんな

あ、

かしこまり  
しました

自慰を開始  
します……  
あっ♡

きゅんきゅん♡  
きゅんきゅん♡  
きゅんきゅん♡







ほらあ。もつと自分が一番エッチだと思う方法で自慰しなさい

はい、弓香さま。あっ♡♡♡

だめえ♡命令しないでっ♡あ

命令きもちこの♡っああ♡

だめだ……だめなのにい

絶対イっちゃいけないのに♡

命令で暴力的な快感を与えられて……♡

情けない格好で自ら腰を振って……♡♡♡

こんなの、これじゃ、

まるでわたしは

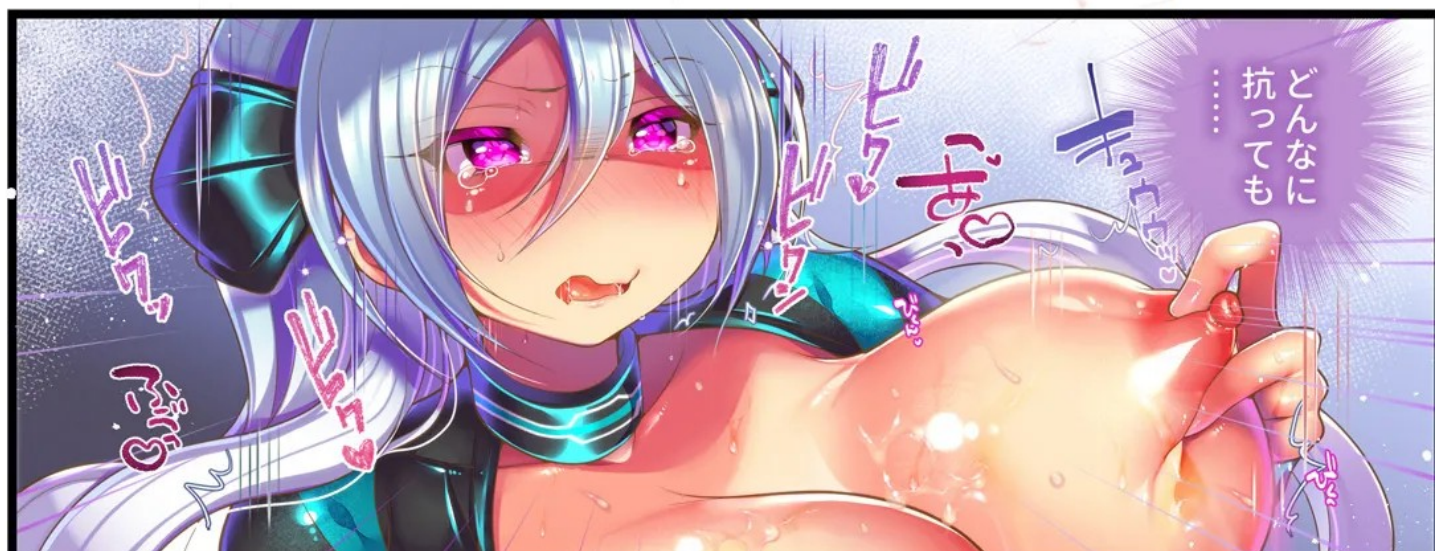
だ、めえ……











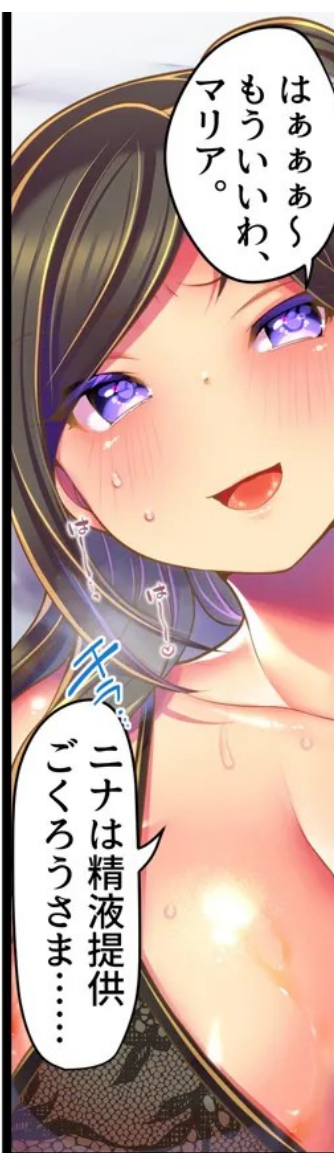








弓香……



はあああ  
もういいわ、  
マリア。

ニナは精液提供  
ごくろうさま……



んっ、あっ、  
あっ、んあっ♡♡♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡

あゝ♡



っ



……あ  
……っ♡  
わたしは  
LSM-098-YN  
“ニナ”……

いつか、きっと  
……あっ♡んっ♡



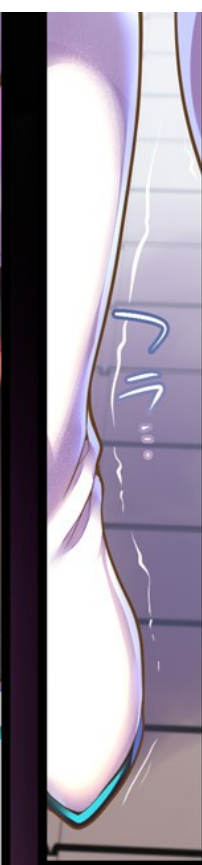
ピーッ。警告。  
エネルギー残量が  
5%を切りました。

疑似人格を  
強制シャット  
ダウン。

自動充電  
モードへ  
移行します

あらw残り物の  
自我が何か  
文句言おうと  
してたのにw







お前はその後、  
リリース品として  
娼館に売ること  
にしたわ。

よかったわね、  
大好きなチンポを  
いっぱいハメて  
もらいなさい

メンテナンスのとき、  
気が向いたらまた  
自我を戻して  
遊んであげる。

きっとその頃には  
私たちの子どもを  
見せてあげられるわね

じゃあ、  
それまで  
さようなら

元気でね  
“ニナ”



END







こんにちは！

本作の原作シナリオを担当している九重慧です。

またまた、れいとうみかん先生のご好意であとがきページを  
いただいています！

『N I N A ver2.0』如何だったでしょうか？

本作は『メタドール N I N A ～エリート社員がセクサロイド義体で  
屈辱奉仕～』の続編となっていますので、もし前作未読のかたが  
いらっしゃいましたら、この機会に是非！合わせてお読みください。

前作あとがきでも書きましたが、N I N Aシリーズは元々、ぼくが某TSF系の  
投稿サイトで連載していた小説が原形です。そのときの連載は結局未完のまま  
途切れてしまったので、今回こういう形で物語の結末まで世に出せたのは、  
感慨もひとしおだったりします。

前々からTSと「機械化」「義体」の相性は最高だと主張してきたのですが、  
れいとうみかん先生の手によってN I N Aが漫画化されたことで、  
あらためてそれを実感しているところです。

機械の女体に心に移されると、どんなエリート男でもプログラムに制御され  
命令ひとつで憎い筈のライバルに土下座させられたり、モード変更で従順な  
ラブドールに変えられたり、あげく電源切られて物言わぬ人形になったりと、  
ヒロインがひたすらモノ扱いで理不尽な目に遭いがちなのが  
TSセクサロイドのえっちなポイントです。今回、二ナちゃんにも一杯、  
そういう目に遭ってもらいました

Pixivとノクターンノベルスにて「N I N A」シリーズとは別な

M E T A D O L L 短編小説もいくつか掲載していますので、

よろしければそちらもぜひ覗いてみてください。

ちなみに「M E T A D O L L」という基本設定は、元々シェアワールド  
として作られたものなので、どなたでもそのままあるいは独自にアレンジ  
してご自身の作品に使用していただけます。

ではでは、またどこかでお会いしましょう！

2022.5.22

九重 慧 (Email: kokonoekei@gmail.com / Twitter: @kokonoekei /

Pixiv: <https://www.pixiv.net/users/12775824> /

Nocturne: <https://xmypage.syosetu.com/x1744m/>)



NINA<sup>2</sup>f  
if

次は羊羹の  
デ-ワを入れるか...

お墨い上げ  
ありがとう  
NINA  
ございます!

みなさまの応援のおかげで最後まで描けました!  
いつも ありがとうございます!  
@九重先生、今回も素晴らしい原作とおまけを  
ありがとうございます!  
kurejamine



# メタドールNINA

## 後日談 IF # 01

作： 九重慧

多国籍企業であるメタブレインテック社。

その内実は、一枚岩からはほど遠いものだった。

事業セクター毎に組織は縦割り、さらにその内部で派閥が存在し、さらには各国支社間での競合も常のことである。

研究開発部門の俊英として出世レースの先頭を走っていた新稲豊が罫に嵌められ、セクサロイド型メタドールに意識を移された出来事も、俯瞰してみればそれは派閥間の勢力争いに起因していた。

新稲の属した派閥が力を持ち過ぎることを懸念した他勢力が、桐生弓香の後押しをしたのである。

自我を抑制されたメタドールとして、娼館で昼夜を問わず客をとらされていた「ニナ」が、数年後に再びメタブレインテック社研究開発部門の部長代理として返り咲くことができたのもまた派閥争いの結果であったことは、実に皮肉な成り行きといえる。



あてがわれた管理職用の個室オフィスで、ニナはデスクチェアに深々と腰掛けた。

ニナの服装は、多少ラフに着崩したレディース用のビジネススーツだ。

モニタに映し出される各国のニュースヘッドラインに経済指標、そして社内各部署から届いているレポートへと視線を走らせる。

メタドールの義体である以上、ニナの目はいくら酷使しても疲れ目になどならない。それどころか、視野のなかで気になる箇所があれば、そこへわずかに意識を向けるだけで拡大映像を視覚野に別ウィンドウで表示するような芸当も可能だ。

ひと通りの情報をインプットすると、ニナは朝のコーヒーを口へ運んだ。

実際にはマグカップが唇に触れることはない。

メタドールOSが感覚のオーバーレイを行い、疑似感覚として淹れ立てのコ



ーヒーを飲む感覚を再現しているのだ。二ナが自分用にカスタマイズしたOSの新機能である。

カフェインが身体の隅々に回って頭が冴えてくる感覚すら忠実に再現されている。

「メタドールになっても、朝の仕事はコーヒーがないとはじまらない」

というのが、二ナのこだわりである。

そういった自分のこだわりを実現するためメタドールOSの仕様に口を出せるだけの権限が、いまの二ナにはあった。

人間の新稲だった頃より、今の二ナのほうが社内で権力を握っているのだ。

「まったく世の中、何がどう転ぶかわかったもんじゃないな」

マグカップをデスクに戻し、二ナは一瞬だけ宙を仰いだ。

脳裏をよぎる、娼館時代の光景。

弓香たちによって組み込まれたプログラムのまま二ナは娼館の客に愛想笑いを振りまき、彼らに体を密着させ、オーダーされた通りの方法で男たちの五感を愉しませるのが日課だった。

脂ぎった男たちのペニスをしごき、深くまで挿入されながら感極まった声をあげる。セックス・ライブラリの情報をもとに、常に最適な方法で男性器を刺激し、体の内にも外にも白濁の迸りを受けてきた。客に射精してもらうたびに礼を言うのも、プログラムの一部だった。

二ナを機械と知ってただのオナホ同然に扱う客もいれば、おどおどした態度で気遣いながら抱いてくれた客もいた。こざれいな格好をした客もいれば、醜悪な見た目で、鼻をつく体臭を撒き散らす客もいる。

毎日、生身の娼婦であれば身体がもたないほどの数の客を相手にし、業務から離れられるのは、エネルギー残量が低下して給電用のクレードルに戻るときだけだった。

人間の脳と違い、メタドールの記憶ストレージは劣化することがない。

今でもその気になれば、娼館で男に抱かれたすべての場面を五感すべてにわたって再生することができる。

来る日もくる日も、甘ったるい喘ぎ声で男を欲情させ、ペニスをくわえ込んできた。義体の給電とクリーニング時以外には休む間もなく娼館に立たされ、客のいない時間帯にはスタッフの性欲処理を命じられた。

自我を停止させられていた二ナに、命令を拒む術は、なかった。その状況に



怒りや疑問を覚えるという自由意志そのものを奪われていたのだから。

当時のことを思い出し、二ナは嘆息した。

——ひとつ間違えれば、あのプログラムに支配されたまま、いまでも馬車馬のように働かされていたかもしれない。

結局、二ナは自力で支配を脱することは叶わなかった。

外的状況の変化がなければ、二ナは経年劣化でスクラップになるまで意思のないセクサロイドとして男たちに抱かれ続けたに違いない。

そうならなかったのは、ひとえに弓香たちの社内派閥が、主流派の座から転がり落ちたためだった。

メタドールに用いられる「ニューロスキニング」技術の応用で、生きた人間の意識が義体へと強制移植されていた——その事実が内部告発という形で、大手ニュースメディアにリークされたのだ。

スキャンダルによって、社内人事が塗り替わった。

会社上層部はあくまでそういった事例は「意図せぬ事故だった」として強引に幕引きをはかった。

その過程で桐生弓香は重要参考人として国家公安庁情報局へと身柄が引き渡され、牧は離島の支所へと左遷。

その後、弓香たちの残していた記録から、二ナが存在が明らかになった。メタブレインテック上層部はあわててセキュリティチームを派遣し、娼館から二ナを保護したのだ。

企業イメージの回復をはかる。——それが当面の最優先事項であると、上層部は判断した。

上層部の意を受けた事業部は、メタドールである「二ナ」を、弓香の後任人事に抜擢するという決断を下したのだった。

二ナは研究開発部のラボに運び込まれ、半年ほどの時間をかけて人間だった頃の人格をサルベージされた。

施されていたプロテクトを解析する作業は特に困難で、ラボのメンバーだけでなく社内のAIエンジニアたちが何人もリモートで解析プロジェクトに参加していたという。

弓香たちの施した人格制御は不可逆的な性質のものだった為、完全な形での人格の復元は不可能だったが、それでも元の新稲に限りなく近い疑似人格として「二ナ」は再構築されたのだ。

大会議室の中央で、新生二ナは起動された。



二ナにとってみれば、いい迷惑だった。

長い悪夢から覚めた途端、大勢の執行役員たちに囲まれて拍手され、復職おめでとう、と口々に祝われているのだ。事の経緯は記憶チップにメモとして残されていたが、それでも戸惑うに決まっている。

戸惑いながらも二ナは復職を承諾した。

そうする以外の選択肢はなかった。

いまだ二ナはメタドールの身なのだ。

いくら制御プログラムが解除されたとはいえ、現実的にいってメタブレインテック社の支援がない限り、生活していくことは困難だ。そもそも会社も、二ナの身柄を手放す気はないだろう。

メタドールである二ナはどんなに業績をあげても、それ以上の昇進ということとは有り得ない。つまり、どの派閥にとっても邪魔にならない、安心な神輿なのだ。

二ナの復職は、そういった社内政治的な均衡の産物として実現したのである。

そして神輿である以上は、上手く担がなければならない。

内心を神妙な表情で覆い隠し、二ナは差し出された形式的な契約書に署名をした。

その日から二ナは、部長代理の肩書き、国内事業に関する大きな権限、そして幹部用のゆったりとした執務室を手に入れたのだ。

ただひとつ残念なのは、制御プログラムが解除された今でも、すべてが元通りとはいかないことだ。

たとえば、二ナは未だに自分自身の名称を、デバイスに登録された「L S M - 0 9 8 - Y N N I N A」として認識してしまう。「新稲豊」が人間だった頃の名前だと知識としては理解していても、もはや意識の奥底でそれを自分の名前と認識できない。

同様に弓香や牧たちに刷り込まれてしまった条件付けのいくつかはいまでも二ナの自我に絡みついていて、二ナの心を束縛しつづけている。

例えば、かつての部下だった牧和彦の名を口に出そうとすれば「マスター」と呼んでしまうのもそうだ。それどころか「マスター」の名を口にただけで、自然と体の内部で性奉仕モードが立ち上がり、股間が濡れてきてしまう。

そのたびに二ナは舌打ちをしながら、自分自身のメタドールOSにクールダウンのリクエストを送信する羽目になる。

そういった条件付けは、もはや人間だった頃の意識と不可分に融合していて、無理に削除しようとする、二ナの人格が崩壊するリスクがあるのだ。

つまり今の二ナはかつての新稲の人格を引き継ぎながら、同時に意識の一〇



～二〇％程度は「セクサロイドのニナ」でもある。その感覚は、恐らく同じ境遇の疑似人格にしかわからないものだろう。



仮想感覚のコーヒーを飲み干した頃には、フロアに人が増えてくる。

この日、最初にニナのもとへ顔を出したのは、マリアだった。

メタドール “マリア” ——人間時の名は、有馬京。

マリアもまた、人格制御プログラムを解除され、自由意志を戻されていた。意志が戻ったとはいえ、マリアもまたOSレベルでのメタドールとしての制約は受ける身だ。元の情報組織にもマリアの居場所はない。話し合いの末、ニナとマリアは和解し、マリアは引き続きニナの秘書を続けることになったのだ。

マリアの服装は、メタドールの標準的なメタリックカラーのユニフォームである。そのほうが機能的でいい、とマリアはそれを好んで着用している。以前との違いは、アクセサリとして着用している、眼鏡ぐらいのものだ。

「わたしなんて、同僚の前でスカートをはくのも抵抗あるがなあ」

ニナは無遠慮にマリアのボディラインを眺め回した。

「それはあなたに長期間メタドールとして人格制御されていたせいで、おれの感覚がそっち寄りになっているということです。あなたのせいですよ、ニナ」

「ま、まあ、それを言われると弱いがな」

「いいですよ。もう水に流したことです。どうせ修復不能な変化ですから。今のおれはこの格好で不服はないですよ。ひと目でメタドールと認識されやすいほうが仕事柄、便利です」

「そういうものか」

「そういうものですね。それにニナだって、あまり意識せず自分でメイクしてるでしょう」

「え、わたしが？」

「無意識でしたか」

「いや……そういえば確かに記憶はある。あまりに自然なことで、自分の行為に違和感を認識できなかった……。参ったな」

「そんなことで参らないでください。とにかくそういうことです。メタドールである以上、おれたちの自由意志は擬似的なものに過ぎないから。あとは程度の問題ですよ、ニナ」

「ま、そうだな。わたしもあまり深く考えないことにする」



では本題に入りましょう、といってマリアはタブレットを取り出した。

メタドール同士であればデータリンクは可能だが、それはお互い緊急時を除いて使わないことにしている。

直近の往訪スケジュールについて手短に打ち合わせを済ませると、マリアは事務的に一礼して部屋を出て行った。

「……にしても、自我戻った状態でよく職場にあのエロコスチューム着てくれるよな」

マリアの後ろ姿を見送り、二ナはしみじみ呟く。

人間だった頃は、何度マリアをお手軽な性処理に使ったか知れない。

マリアに自我を戻してやったときは、それはもう凄い剣幕だった。二ナの胸ぐらを掴んで殺気のこもる目で凄まれたものだ。「まあまあ。姉妹機同士、仲良くしようぜ」と軽口を叩いたら、本気で首を絞められた。

二ナがなんとか許してもらえたのは、二ナ自身もマリアと同じような立場を味わってきたからだ。

そして、二ナが疑似人格を生身の肉体に戻す研究を推進すると知って、マリアはその技術が実用化されるまでという条件付きで、二ナの秘書に戻ることを了承したのだ。

通常の業務だけでなく、いざとなれば工作人員としての技能を活用して潜入や身辺警護もこなせる。実に頼れる「姉妹機」だった。

「さてと……」

二ナは業務上のメールやコミュニケーションツールの通知へと意識を戻す。

メタドール本来の演算リソースを借り、数千件の新規メッセージを一気にレビューして、決裁が必要な案件を処理していった。

並行して事業計画案の説明資料をまとめあげる。

すべて手でキーボードを叩いて作業するのは、ちょっとしたこだわりだった。

ネットワークに接続して仮想空間内で業務を行えば秒単位で済む仕事だが、それでは味気がないというものだ。

結局、午前中に仕事はあらかた片付いてしまった。

執務室を出た二ナは、オフィス内をあてもなくほっつき歩いた。

「あ、お疲れっす、二ナ主任～」



「二ナ主任、ちーす」

「二ナちゃんだ、やほー」

二ナの姿を見かけた一般社員たちが、気安く声をかけてくる。

彼らは、二ナが「新稲」としての自我を取り戻していることを知らされていない。

二ナことは本当に上層部が気まぐれで、ただのお飾りとして今の地位に就けているという理解だから、二ナに対する態度は「一日〇〇長」のアイドルに対するそれに近いものがある。

そのほうが警戒されなくて便利なので、二ナもあえて誤解を解こうとは思っていない。「二ナちゃん」呼ばわりにも笑顔で返すぐらいのサービス精神は発揮している。

「みんなお疲れさま。仕事で困ったことがあったら、なんでもわたしまで相談してくださいね」

「二ナちゃんこそ、その巨乳で肩が凝ったりしたら相談してよね～」

「あら、山田さん。こんな巨乳でも肩が凝らないのはわたしたちメタドールの特権なんですよ？」

「うそおー。ちょっと、二ナちゃん羨ましいなあ」

そんな感じで、ノリのいい女性社員らと他愛もないお喋りをするのも、以前なら絶対に起こりえなかったことだ。

男の部下たちも、二ナがひとりひとりの手を握り、褒め、おだててやると、やたら張り切って仕事をするようになった。

（これ、あきらかにわたしが「新稲」だった頃より、部署全体の効率がアップしてないか？）

釈然としない気持ちもあったが、それで職場がうまく回るのなら結果オーライだ。

実のところ、二ナはお飾りの管理職に甘んじる気は、さらさらない。

上層部の長老たちは二ナのことをいつでも替えのきく文字通りのお人形と甘くみているのだろうが、いずれ二ナは社内で権力基盤を築いて上層部の「老害爺」どもをひとり残らず隠居させてやるつもりだった。

いまだ生身の肉体に戻る見込みがない以上、会社乗っ取りぐらいしか楽しみがないではないか。

そのためには、人心を掴んでおくに越したことはない。



当面、ニナは一般社員の前では「ニナちゃん」として振る舞う。

以前の稲新ならメンタルが保たなかっただろうが、幸いというかニナの意識に紛れ込んでいるセクサロイド型の思考様式のおかげで、さしたる抵抗感もなくニコニコしてられるのだ。

「ああ、こんなところにいた！」

雑談が発展して、自社の次世代型セクサロイドに盛り込みたい新仕様についての白熱した意見交換になっていたところに、ぬっ、とマリアが顔を出した。

「楽しそうなお話中にすみませんが、この後、メディアの取材対応があります。急いで準備を、ニナ」

「やれやれ。わかったよ。……みんな、この続きはまた今度だね」



メタブレインテックは不祥事のマイナスイメージを払拭するため、このところ積極的にメディアへの露出を増やしている。

それにあたり、広報課からの要請で、ニナがイメージキャラクターの「NINA」に抜擢されたのだ。

無論、ニナは断ろうとしたのだが、すでに企画として会社上層部のゴーサインが出ている以上、業務命令には従うほかなかった。

以来、会社の顔ともいえるハイエンドクラス・メタドールのNINAとして、ニナは会社のプロモーション映像や、メディアの取材対応には必ず駆り出されるのだ。

NINAの端正な外見と、時にはメタドールらしからぬ歯に衣着せぬトーク、時には毒舌すら吐くキャラは、思いがけず世間で受けてしまい、それ以来ますますニナは、こうした広報活動への協力を断れなくなってしまったのだ。

控え室につれてこられたニナは、オフィスで着用していたパンツスーツを無造作に脱ぎ捨てた。

その下からは、メタリックな光沢を帯びたメタドール専用スーツが現れる。

鏡に向かって髪の手直しをやり直し、メイクの手直しをやり直すと、そこにはメタドールNINAができあがっていた。

「スカイメディアTVの重鎮がスタジオで待機しています」

「よし、行くか。さっさと済ませよう」



スタジオ入りして挨拶をするなり、ばしゃばしゃとカメラのフラッシュを浴びた。

ニナは先方の期待に応え、体の前で手を重ね、世間の思うメタドールっぽいポーズをとり「いい画」を撮らせてやった。

取材そのものは順調に進んだ。

会社の新プロジェクトについて語り、メタドール開発の苦労話をそれっぽく脚色して話し、そのあとスタジオを出て社内を回り、当たり障りのない仕事風景を紹介する、といった流れだった。

取材が終わった後、先方のプロデューサーがニナに近寄ってきて、わざとらしい目配せをしてきた。

「まだ何か？」

「や、あのさ、業界の噂なんだけど、NINAちゃんって実はセクサロイド型ってホントなの？」

「ああ、そのことですか。ホントですよ。特に秘密じゃないです。……なんなら、味見していただけますか？」

「ええっ、マジ？ いいの！？」

「いいですよ～。その代わり、いい記事書いてくださいね」

最初からそのつもりだったくせに、とニナは内心毒づく。

プロデューサーはさっそく、ニナにくっつき、胸のあたりに手を這わせてきた。

「あははっ、がつつかないでくださいよお。ちゃんと専用のお部屋がありますから」

相手が大物だったり、大事な取引先だった場合、性接待のリクエストには応じるようにしている。

体をまさぐられるとゾワッとした感触が広がるが、すぐにそれが性的快感へと変換される。

わさわさ。絶妙な加減で下乳のあたりを撫でられ、思わず「んっ」と声が漏れてしまった。

(やばいな。こいつ女体の扱いが上手い。……牧みたいなタイプだ)

性接待用の応接室に入る頃には、ニナは股のあいだに堂々と指を這わされ、喘がされていた。



性的刺激の処理負荷が高まり、すぐに性処理モードが起動した。

このモードでは、男に抱かれる嫌悪感は薄まる。

ニナは男の体に手を回した。自分からキスをして、いやらしく舌を絡めていった。

「NINAちゃん、エッチだねえ。おじさん、たまらないよ」

「本番はこれからですよ。今日は、弊社のセクサロイド技術のレベルの高さを、お兄さんのおチンポでしっかり味わっていただきます」

男をベッドに引き込み、ニナは「本能」の命じるままに男の勃起した逸物を口に含んだ。唇と舌先で十分に焦らしてから、騎乗位の体勢でそれを秘部に迎え入れた。

腰をゆっくりと上下し、膣の締めつけを調整。射精までの挿入時間をキープする。男の腰遣いが絶妙で、ニナも感じてしまう。

たっぷりと注挿を愉しませてから耳元で「イッて」と囁くと、男は呻きながら盛大に射精した。

「どうですか、気持ちよかったですか？ ……わたしも、とっても気持ちよかったです」

「はあ、はあ……なににってるんだい、NINAちゃん。二回戦目、いくよ？」

「ああ……はい、喜んで」

ニナは自分の瞳がピンクに染まっているのを自覚しながら再度、男に抱かれた。

人間だった頃の自分には、とても見せられない姿だ。

そう思いながらも、挿入される側のセックスを愉しんでいる自分がいた。

プロデューサーの男は結局、三回もニナの中で精を放ち、ごきげんな様子で引き揚げていった。

壁の時計を見上げる。

いつのまにか、もう定時を過ぎていた。

一度着替えてオフィスへ戻るか、それとも――。

ビピッ……

メタドールに内蔵された通信リンクを通じて、信号が送られてくる。

セクサロイド型のメタドールは本来、夜の住人なのだ。



「はい……社員向けセックスカウンセリングの準備に入ります……」

信号を受信した二ナは、性処理モードの継続を強制され、会社の福利厚生ルームへと移動した。

夜になって信号を受信したドールは、セックスによる社員のストレス発散をサポートしなければいけない。

それも業務の一環だ、と二ナの意識には刻み込まれている。



福利厚生ルームで、二ナはぼんやりと意識を取り戻した。

先ほどまで性処理モードにリソースを取られて、意識レベルが低くなっていたのだ。

セックス人形の状態、二ナは営業部の若手社員にチンポを突っ込まれていた。

（ああ、そうか。性処理モードを起動してたから、あの信号を受信して人形状態になってたんだ）

これも、解除できていない条件付けのひとつである。

社内に配備されているセクサロイド型に対して当番制でこの信号が送られてくるのだが、それが二ナにきてしまうと性処理業務を拒否できない。

自分の体をチェックしたところ、すでに1人目の性処理は終わっていて、いま二ナの上で腰を振っている男は、本日2人目ということになる。

男は、はあはあと息を荒くしながら、激しく腰をつかっている。

女性には嫌がられそうな、独りよがりのセックスだった。

よく見れば、最近彼女にフラれたとかで落ち込んで入社してきた営業の若手だった。

（あーあ、なんかオナホ代わりにされてる気分だわ。きみ、そういうとこだぞ）

若手社員が射精した直後、まだ勃起して敏感な状態のペニスを口に含み、濃厚なフェラで二回目の射精をさせた。

強すぎる快感で仰け反った若手に、ねぎらいの言葉をかけてやる。

「元気出して、明日からまた頑張ってね。あと、人間の女の子にはもう少し優



しいセックスをしたほうが喜んでもらえるとおもうよ」

「は、はいっ。元気出ました」

その日は、セックスカウンセリング（という名の性奉仕業務）の時間が終了するまでに、五人もの男性社員の性欲処理をするはめになった。

いまだにセクサロイドの仕事を続けさせられることについて、不服は勿論ある。あるのだが、一方で二ナが性処理の相手を務めることで仕事のモチベーションが上がる、という声もあがっているのは事実だ。

男性社員が二ナが指名するには仕事で評価点を稼がないといけないので、それ目当てに仕事を頑張る者も多いのだとか。

——ちなみに女性社員は、希望者全員の相手をするにしている。二ナに抱かれないという女子と、抱きたいという女子の比率は、今のところちょうど半々ほどである。



一日の業務を終え、エネルギー残量が一〇％を切っていた。

視界にアラートの表示が映し出され、二ナの体の制御はメタドルOSへと引き渡される。

機械人形のような足取りで、二ナの体は給電機能を持つクレードルへと向かっていた。

クレードルの端子を股間へと挿入すると、自動的にシステムが接続された。

給電中、疑似人格はシャットダウンされ、二ナはスリープモードへと移行する仕様になっている。

二ナがただの機械へと変わる瞬間だ。

シャットダウンの直前に、夢を見ることがある。

それはメタドルのAIコアがシャットダウンに伴って大量の情報処理を行う際に、疑似人格モジュールがそれを「夢」と捉える現象だ。

今日も二ナは、夢を見た。

いや、夢だと思ったが、それはいつもとはどこか様子が異なっていた。

いつの間にか、畳の床を、素足で歩いている。

もちろん現実では有り得ない。

そこは、見知らぬ和風邸宅の中だった。

新稲が幼少期を過ごした家とも違う。夢の産物にしては間取りが具体的だった。



広間を横切り、板敷きの廊下へと出る。

突き当たりにあった障子を開けると、そこだけ六畳間ほどの洋間になって、サーバーPCらしきマシンやモニタ類が雑然と並んだ中央に、ひとりの女がゲーミングチェアに腰かけ、キーボードに指を走らせていた。

部屋の窓の外には、星空だけが広がっていた。

(ここは、夢じゃなくて、仮想現実なのか……?)

ようやく二ナはその可能性に思い至る。

そのとき女がくるりと振り向き、二ナに向かって頭を下げた。

ひどく地味な印象の女だった。年齢はまだ若そうだ。二十歳そこそこといったところか。

服装が紺の地味なワンピースで、おまけに前髪が目の上までかかっている、あまり化粧をしたこともないタイプに見える。

「こんにちは、二ナさん。突然、お招きしてすみません。二ナさんのAIコアがネットワークに直接接続されるタイミングがこの瞬間しかなかったので」

「……君は、誰だ？」

女が名乗ったハンドルネームは、二ナの記憶にあった。

たしか、娼館から保護された二ナから「新稲」の人格をサルベージしたプロジェクトチームの1人だった。

たしかにプロジェクトの参加者の中には、遠隔地からリモート参加したエンジニアも何人かいたと聞かされている。

女が、ぱちんっと指を鳴らすと、それまで所狭しと機器類が積まれていた部屋が、一瞬にしてベッドルームへと変化していた。

やはりここは仮想現実空間なのだろう。

「あの……。私、二ナさんと、その、してみたくて。確か、女性社員は希望者全員、相手してくれるってことだったから……」

「なんだ、そんなことか」

拍子抜けして二ナはくすつと笑った。

「そのために、わざわざこの仮想空間にわたしを呼んだの？」

「は、はい……」



女のアバターは首をすくめ、頷いた。  
現実では顔を真っ赤にしているのだろう。

「女の子ならいつでも歓迎よ。とっても気持ちのいいマッサージをしてあげる。  
じゃあ、服脱いでくれる？ って仮想空間でやった経験はないんだけど……」  
「あ、あのっ、その前にですねっ」

再び女は、ぱちんっと指を鳴らした。  
新稲は軽い目眩のようなものを感じた。  
目の前の女のアバターは生まれたままの姿になっていた。だが、それ以上に強烈な違和感があった。

自分の体を見下ろして、新稲は違和感の正体を悟った。  
女が指を鳴らした瞬間、新稲のアバターは人間だった頃の「新稲」に変化していたのだ。いつもなら視界を覆わんばかりの乳房のふくらみが消え失せ、ごつごつとした胸板になっている。

「こうしたほうが、私の好みなんです」  
「そんな、これ、どうやって俺の体のデータを……っ?!」  
「……時間がないので、急ぎましょう」

またもや女が指を鳴らす。それと同時にドクンッという心臓の音を聞いた気がした。

新稲の内側で、長らく忘れていた牡の欲求が首をもたげた。  
股間にペニスがそそり立つ生々しい感触。  
どちらからともなくベッドに場所を移し、互いの肌に触れた。  
まるで現実のようにリアルな肌の質感が指に伝わる。  
新稲は疼くような欲望を覚え、女への愛撫もそこそこに、いきり立つペニスを挿入した。

熱く濡れそぼった洞穴に、肉棒を突き立てる。その感触はかつて生身の肉体で得ていたセックスの快感に限りなく近いものだった。

新稲は夢中になって女の柔肉を食った。  
いつぶりかの、征服する快楽。  
新稲がゆっくりとペニスをスライドさせるたび、女は快楽の吐息をもらした。  
恥ずかしげに身をよじっていた女が、やがて自分から腰をくねらせ、少しでも深い場所まで新稲のペニスを受け入れようとしていた。

先に絶頂を迎えたのは女のほうだった。新稲の背中に指を食い込ませ、しがみついてくる。



その直後、新稲もまた限界を迎え、精を迸らせた。

セックスを終えて、新稲はあらためて自分自身のアバターを観察した。  
外見や肉体感覚の再現度合いといい、最高級のものだ。

ぱちんっ。

空間が歪み、ベッドルームだった場所は見覚えのあるキャンパスの一角に変わっていた。

今度は見覚えのある場所だ。そこは、新稲の母校だった大学の広場だ。VR空間の中に、母校の見慣れた光景が精度高く再現されている。

「君は、いったい……」

「どう、新稲くん。思い出してくれた？」

——思い出す？

思い出すまでもない。卒業後も何度か訪れた場所だ。

いや、違う。思い出すのは、別なことだ。

そのキャンパスを背景にして立つ彼女の姿を、新稲は知っていた。

そうだ。彼女とは、この広場で最初に出会って——。

「残念。そろそろ時間切れだわ。また別な機会にね」

女の姿はいつのまにか、よく見知った桐生弓香の姿に変わっていた。

ぱちんっ。

彼女が指を鳴らすと、新稲は二ナに戻っていた。

「じゃあ元気でね。私たちも元気でやってるわ」

「待って。わたしには、まだ聞きたいことが」

「バイバイ、新稲。——ううん、二ナちゃん」

二ナの前で仮想現実空間が蜃気楼のようにゆらぎ、やがてキャンパスの光景も弓香の姿もかき消すようになくなった。



——LSM-098-YN "NINA" は給電のためシャットダウンしま



す。

現実世界での二ナは、虚ろに目を見開いて動作を停止した。  
給電状態を示す小さなLEDランプだけが機械的に点滅していた。

数時間後に給電を終えて再起動した二ナのメモリには、束の間の夢のできごとは何も残されてはいなかった。

メタドールNINA 後日談IF#01 (完)